

郷土の本棚⑭（文責・赤川仁洋）

# 原生林のような荒れ野を開拓

「新しい村」<sup>ひがし</sup>（東 豊子著）

この本を読んでいるうちに、脳裏に浮かんだシーンがある。NHKの昨年の上半期に放映された朝の連続ドラマ「なつそら」の一場面。戦災孤児である主人公の奥原なつが北海道の酪農家に引き取られる。そのときの小学校の同級生、山田天陽の一家が開拓農民で、作物が育たない荒地に困窮、天陽の両親は離農を決意する。「天陽君の家族を助けて！」なつの懸命の訴えに、なつの養

祖父である柴田泰樹の「開拓者魂」が揺り起こされ、酪農仲間や地域の人たちを引き連れて、切り株や石ころだらけの荒地を開墾、すばらしい畑に生まれ変わる――。

「新しい村」は、庄原の地で実際に行われた開拓者の輝かしい物語だ。昭和二十年八月十日の敗戦後、復員兵や外地で生活していた人たちが続々と帰国して来た。しかし、戦争で荒廃した祖国に仕事はな

く、食べ物も着る物も不足して、みんな飢えていた。当時の日本では、一千万人の餓死者が出るのではないかという噂が流れたほどだ。

日本政府は緊急に「開拓事業」を計画し、全国の山や原野を開拓地として指定して、入植者を募集する。庄原の「新しい村」も、その一つだった。「昭和二十一年八月一日、まず十五名が入植し、続いて二次、三次と入植して、四十五名の人がこの地に入ってきました。でも、これまで都会へ住んでいて鍬など持ったことのない人たちがほとんどといっていいほどです。もう四十才をこえている人が十人以上もいました。若い二十才代の人は三、四人。」（新しい村）

過酷な開拓作業がスタートした。開墾する土地には松の木や雑木、その根元にはびっしりとクマザサやツツジが生い茂っている。道具といえば斧とノコギリ、そして四キロもある重い開墾鍬で、現代のような機械が何もなかった時代だ。すべて人力が頼りである。

朝はまだ夜が明けない四時過ぎに山に入り、月の夜は十時過ぎまで作業を続けたこともあるという。木を切り倒した後も、地中深くに根を張った木の根っこに悪戦苦闘、一日中かかっても一つの切り株を掘り出せないことも度々だった。

木や藪を取り払っても、掘り返された石を除かなくてはならない。また、山地は高低が激しく、高みの部分から土を運んで土地を平らにする必要がある。バイスケという直径五十センチぐらいのかごに石や土を入れ、てんびん棒で肩に担いで運んだ。

「あまりに激しい労働に耐えきれず家族が病気をしたり、亡くなったりして、途中でここを去っていく人も出はじめました。」（新しい村）

水田のための水を確保するために、用水池の嵩上げをし、そこから水を引くための水路



表紙の題字は国利義勇氏  
表紙絵と挿絵（下）は寿山ツヨ子氏。



を掘った。すべて人力による総力戦である。ようやく田に水が引けるようになるのが昭和三十年六月、開拓がスタートしてから十年近くの歳月が流れていた。

しかし、歓喜の瞬間はすぐに暗転する。田を満たしていた水が、三十分ぐらいで消えてしまった。そうき(ぎる)田だった。ぎるのように水が土の中に吸い込まれてしまう。仕方がないので、水があるうちに手早く苗を植え、水がなくなると木の枝で穴を空けて苗を押し込んだ。

「水がもれても、もれても、田の草取りが難儀でも、日やけて収穫の少ない年があっても、水田作りは根気強く続けられていきました。」(新しい村)

現在では重機のローラーで田の底を固めればいいのだが、機械のない当時は、自然に底地が固まるのを待つしかない。五、六年もすると水が一日ぐらい持つようになり、そして十年ほど経ったときには水を湛えた立派な水田が出来上がった。村人の苦勞と忍耐、そして団結力の成果だった。

作者の東豊子さんは、小学校の教師としてこの「新しい村」のある地域の学校に赴任。それから三十年以上の歳月が流れて、教師を定年退職した東さんは当地を再び訪れて、この物語を書くことを決意する。

子どもたちに、この感動の物語を伝えたいと、児童文学として、子ど

もの視点で書かれている。かつての農家は、子どもたちも貴重な働き手だった。家の手伝いをするのは当たり前前、「新しい村」は家族の物語でもある。

プライバシーに考慮する必要があったのか、「新しい村」には具体的な地名は記されていない。「三十年間終始遠くから見守った勝光山」という記述を頼りに尋ね歩くと、「富田之碑」にたどり着いた。「新しい村」の作中では「開拓の碑」と紹介されている。碑銘の右に「創立三十周年記念」、左に「昭和五十一年八月建立」と刻まれているのは文中と同じ。川北町富田地区、ここが新しい村に間違いなかった。

平成八年、富田創立五十周年記念として「新しい村づくり(五十年のあゆみ)」という小冊子が作られたが、各種資料と共に、多くの富田区民の



思い出が掲載されている。「変容」と題された前岡利徳さんの一文を紹介しよう。家を建てるときの苦勞が書かれている。

「家の木材は現地の材料が基であった。(中略)土台となる石が現地には一カ所もない有様、それで西城川門田町石渕と外部から運ぶ計画であったが、運搬する道路が必要で、先に道路工事に各自出夫し、荷車で現同仁病院の坂を五人から十人で三十戸分引き上げた。荷車引は今も不撓不屈の精神となったものと想う。」

ひび割れし稲田眺めて吐息せる

富田の大地今水満ちる

記念誌の田宮美和子さんの短歌に、開拓民の万感の想いが込められている。

「新しい村」は昭和六十二年八月十五日に刊行されたが、同時に作られた本がある。「庭の大えのき」で、表題作と「新しい村」が併録されている。「庭の大えのき」も東さんの作品で、戦前のことが中心に書かれ



ている。作者の三人の兄が兵隊に徴集され、長兄が戦死、南海の戦場から帰国していた次兄も呉の大空襲で命を落とした。

作者は、戦争の中で青春を過ごした。平和の大切さを知る子どもたちを育てたいと、教師の道を選んだ。そして、兄たちの分まで一生懸命生きようと誓った作者の目に、荒地を開墾して豊かな田畑となった富田地区の美しい光景は、とりわけ輝いて見えたのではないか。

大正十四年生まれ、東豊子さんは、数年前に体調を崩し、介護施設に入所している。現在はコロナ禍で面会は不可、残念ながら話を聞くことはできなかった。

「新しい村」の中で、北海道の広島町について書かれている部分がある。明治維新の時に、職を失った多くの武士たちが、身一つで北海道に渡って原野を切り開き、雪深い土地で新しい村を作った。今では立派な町になっている。広島県の人たちが集まって作ったので「広島町」――。「広島道の北海道」、中国山地の雪深くて辺鄙な場所にある庄原のことを揶揄した呼び方だ。「新しい村」を読んだ今、広島道の北海道だと自分の郷里のことを胸を張って紹介できると思った。

※「新しい村」「庭の大えのき」共にどら書房の郷土資料本コーナーにあります。貸出可能です。

# 倉橋由美子『パルタイ』

## 前衛党への憧憬と失望

幅のある批評ができる文芸評論家の齋藤美奈子が倉橋由美子「パルタイ」(1960年刊、文藝春秋)を取りあげて「『革命党』を諷刺どころか告発した小説であることは言をまたないでしょう」と断じました。齋藤の著作、一昨年の2018年刊『日本の同時代小説』(岩波新書)でこのことです。果たしてそうでしょうか。

同小説は、いわゆる安保闘争が山場を迎えた1960年初頭に、明治大学の懸賞小説で学長賞を得た小説です。これを読んだ文芸評論家平野謙が「革命運動の根深い純粋性と観念性のパターンを『あなた』という一学生に具象した作品である」と賞賛して、評判となりました。

粗筋を紹介します。

「ある日あなたは、もう決心はついたかとたずねた」と始まります。パルタイ(党派、当時の日本では共産党をさす)に入るためには、詳細な(経歴書)が必要なのです。

「あなた」の恋人と考える「わたし」は、履歴書を前に逡巡しています。

履歴書は全人格を露出するように思え、パルタイの労働者が集まる部屋は空気が粘液質で濃密すぎる、と思

いる思案します。ところで、合宿のあいまに機関紙を売りに出て、選挙法違反などで逮捕されます。拷問を受けるが完全黙秘を通します。「わたし」は帰宅すると、パルタイ入党の許可通知が届いています。が、「仔細に検討したのち捨て」てしまうのです。

の問題ではなくて、倉橋自身の問題である(舟橋聖一)と、そこまで心配した委員もいました。当時としては、革命党を諷刺したり、告発した小説として捉える委員はいませんでした。

念のためにつけ加えると、平野謙の「革命運動の根深い純粋さと観念性」という表現には、当時としても、革命党への齋藤と同様の疑問が持たれていることをうかがえます。だが、どのような深みで批評できるかが関心事だったと思えます。

齋藤の評は、その「政治の季節」から70年の時を隔て、同時代的な実感や熱気を失った今、立ち位置が違う視線で見るとどうなるか、そのことを如実に物語っています。私は、齋藤の評が見間違いだと思っているのではありません。それどころか、彼女のファンとして、彼女の個性的で鋭い文芸評や時評は、真っ先に読みます。

文学作品を現在に引きつけて読むのは、当然な行為です。ただ、時代背景をどう配慮するかは、それぞれの資質ではないでしょうか、ということ。

次回は、小田実『何でも見てやろう』を取りあげます。

### また読んでみたい本⑤3 青年たちに 音谷 健郎



【文藝春秋版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第53回は、倉橋由美子の『パルタイ』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

うからです。そういう「わたし」は、労働学校の事務をしています。

「あなた」の発案で、新しい学生を対象に、川べりで1週間の合宿をします。「組織」がわたしの自由を拘束することによってわたしをかつてないほど自由になっている」など

芥川賞の候補作となり、選考委員会で、大いに話題になりました。「新しさ」を評価する一方、作者の「弱々しさ」を心配したり、作品を評価しながら、「わたし」を革命党から離反させた倉橋について、「今後倉橋が墮落するかどうかは、銓衡(せんこう)

## 「草花の博物誌」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

## キクバヤマボクチ 若葉をつんで「ほうこ餅」に

三月三日のひな祭には草餅を供え、女の子の健やかな成長を祈る風習が伝えられています。今では草餅というヨモギの新芽をお餅につきこんで作りますが、もともとはハハコグサを使っていたようです。

中国の古い書物「荊楚(けいそ)歳時記」に「三月三日、ハハコグサの汁をしぼり 蜜と一緒に粉にまぜ

竜舌(りゅうぜつ)はん(米偏に半)

という餅を作る。これを食べると

健康が保てる」とありますが、この

中国の風習が九世紀ごろ(平安時代)、

日本に伝わり、ひな祭に草餅を供え

るようになったようです。やがて、

十五世紀(室町時代)になると、ハ

ハコグサにかわって草餅にはヨモギ

が主に使われるようになったよう

です。

県北では草餅にヨ

モギを使うだけでな

く、キクバヤマボク

チの若い葉をつんで

草餅をつくります。

四月、山の雪もとけ、

木の芽がようやくほ

ころびようとするこ

ろ、林の中では春の

陽射しを浴びてキク

バヤマボクチの若葉が伸び始めています。その若葉は白いこまやかな綿毛に包まれていて、そのようすはハ

ハコグサの若葉にそっくりです。つ

みとったキクバヤマボクチの若葉は

さつとゆで、お餅につきこみます。

県北ではヨモギをつき込んだお餅は

「よもぎ餅」、キクバヤマボクチをつ

きこんだお餅は「ほうこ餅」と呼ん

で区別しています。

キクバヤマボクチのことを「ホウ

コ」と呼んでいます、これはハハ

コグサを「ホウコグサ」とも呼んで

いることに関係があるのではないだ

ろうかと考えています。つまり、も

とも草餅に使っていたハハコグサと同様、キクバヤマボクチも若葉が白い綿毛に包まれていて、お餅につ

きこめるところからキクバヤマボク

チのことも「ホウコ」と呼ぶようにな

ったのではないのでしょうか。

ほうこ餅の恵みを私たちにもたら

したキクバヤマボクチは夏になると

大きく育ち、やがて秋にかけてアザ

ミに似た大きな花をつけます。この

頃になると葉は「ほうこ餅」にした

ときのやわらかさはなく、たくまし

くなっています、でも葉の裏には

白い綿毛を残していて、ほのかに春

の香を漂わせています。

## ツリフネソウ 「かんしやくもち」の属名

茎から長くのびた細い花柄(かへい)が花の中央につき、大きな花を水平に支えているようすは、まるで外国航路を走る大きな客船の甲板上

につるされた救命ボートのように見えます。また、上の花びらは大きく

そりかえり、花の形が帆かけ船のよ

うにも見えます。



花を船に見たて、花が細い花柄で  
つるさているようすからツリフネ  
ソウと名づけられたようです。

ところで、動物でも植物でも世界  
の国々でそれぞれの呼び名があり、  
まちまちです。国によって呼び名が  
ちがうととても不便ですし、困りま  
すので、世界共通の名前で呼ぶよう  
きまりがもうけられました。そのき  
まりに従って名づけられたのが学名  
です。学名は私たちの名前と同じよ  
うに姓にあたる属の名前と名にあた  
る種類の名前の二つからなりたつて  
いて、ツリフネソウの学名はインパ  
チエンス・トキスターイといえます。  
つまり、インパチエンス属のトキス  
ターイという種です。理科の実験で  
よく使われるハウセンカもインパ  
チエンス属、人間にたとえると、ど

ちらも同じ姓を名のっているわけ  
です。

インパチエンスという属名は「が  
まんできない」とか「かんしゃくも  
ち」という意味です。そのことから  
「Touch-Me-Not（私にさわらないで）」  
とツリフネソウ属英語では呼んでい  
ます。

ツリフネソウ属を「かんしゃくも  
ち」などと呼んでいるのは、花が散つ  
て実ができ、うれた実をさわるとパ  
チンとはじめて種をとばすところ  
に注目したからです。花が散って大  
きく実がうれた頃、「さわっちゃい  
や」というツリフネソウをさわって  
みましょう。かんしゃく玉がはじけ  
るように「かんしゃくもち」のツリ  
フネソウは種をはじきとばすでしょ  
うか。ためしてみましよう。



草花の名前をつけると  
き、日本は花の形やつき  
方に目をつけて名前をつ  
け、ヨーロッパの国々  
は実がはじけて種をとば  
すところに注目して名づ  
けるなど、特徴をよくと  
らえて名づける中にもお  
国柄が出ているようです。

## 「つれづれ歌談」④

松岡 初枝

天が高く青々として、紅葉が北  
からやって来る頃になると、歌詠  
みは色とりどりの山や里の美しい  
様を歌いあげます。

・ちはやぶる神代もきかず竜田川  
からくれなぬに水くぐるとは  
(在原業平)

百人一首の有名人、イケメン業  
平様は、神代（かみよ）の昔でも  
こんな赤い水面（みのも）を知る  
人があっただろうか、と言ってい  
ますが「ちはやぶる」は枕詞（ま  
くらことば）で、神に掛かります。  
落語では、花魁（おいらん）「ち



はや太夫」と「神代太夫」に振ら  
れた関取り「竜田川」の嘸に仕立  
てられています。が、「たらちね」  
も同様に枕詞から題を取った落語  
です。「たらちね」は、母に掛か  
る枕詞です。

・のど赤きつばくらめ二つ梁にゐ  
てたらちねの母は死にたまふなり  
(赤光 齊藤茂吉)

秋ではありませんが、赤い胸の  
燕が、母の死を見守っている様が  
切なく、医者でもある茂吉の母へ  
の思いが伝わってきます。

茂吉には茂太（しげた）と、作家、  
北杜夫という息子がいますが、二  
人共々医者で、名作家です。しか  
し輝子夫人はこの二人の息子の肝  
を冷やす程のブツ飛びおば様で、  
茂吉の死後、世界中を旅して歩き、  
その様子は茂太氏の本に楽しく描  
かれています。

「ネエ君、おふくろはどこに行っ  
てるの？」  
「御存知ないの？ おかあ様は南  
極ですよ」

燕と母の死を詠んだ茂吉、妻の  
輝子さんは南極でペンギンと遊  
ぶ。流石の大物ぶりです。

地面に腹這いに伏した狒犬の背中にまたがった。頭を撫でようと手をやると、拒絶するようにブルブルと首を振った。振り落とされそうになって、鬣（たてがみ）にしがみついた。獣臭が鼻腔に押し寄せてくる。一気に跳躍、満月に向かって夜空を駆け上がる。大気を蹴って疾走する。前に進んでいるはずなのに、頭上の星が前方へと流れて行く。

永遠のような時間が過ぎた。激しい風圧に、いつの間にか目を閉じて、鬣を固く握り締めていた。

唐突に風が止んだ。目を開けると、秋晴れの青空の中にいた。下を見ると山里の田園風景が広がっている。（しっかりとつかまってるよ！）

心の中で声が出たかと思うと、頭から急降下だ。地面に激突する直前、ふわりと身体が翻って、ゆるりと着地した。ずり落ちるように地面に降りると、足が震えている。

狒犬は口を閉ざしたまま、悠然と吽形（うんぎょう）の石像に向って歩み寄る。そして、影が溶け込むように同化した。

（敬老の心はないのか……）

冷笑する声が聞こえたような気がした。石段を降りようとして、人工関節を入れた膝の痛みが消えている

のに気付いた。身体が軽い。ここはもう三四半世紀、七十五年も前の世界なのだ。

実家の裏手にある木立の中を歩いて行くと、大きな祠がある。荒神さんを祀っている。裏手の方でカサコソという小さな物音や動物の息遣いの気配がする。「ウンボク！」

## あうん2

現代御伽草子④9

あきふゆひこ  
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

名前を呼んだ。しばらく待ったが反応はない。「ウンボク！」

ようやく、小柄で痩せた少年が姿を現した。坊主頭に黄ばんだランニング、ひざ下までのつんつるてんのズボン、手にした紐の先には赤毛の子犬がつながれている。狐に似ているからコンタ。少年も、犬も、警戒する目でわたしを睨んでいる。

「陵介に頼まれたんだ。これを届けてほしいとな」

ポケットからハンカチに包んだ吊るし柿を取り出した。三つある。ウンボクが駆け寄って、一つ取って口に入れて齧った。甘みを味わうようにしばらく舐めている。ウンボクと出会ったときのことを思い出して、思わず笑ってしまう。

柿の木を物欲しそうに見上げてい

夕の前に差し出した。種まで噛み砕く音が響いた。

残りの二つの干し柿を、ウンボクはズボンのポケットに大切にしまった。妹と弟に持って帰ってやるのだろうか。

「陵介は？」

「熱を出して寝ている」

子供の頃のわたしは病弱で、よく腹を下したり熱を出した。実際、その日も風邪で寝込んでいた。

「おじいさんは、陵介の何？」

「遠い親戚だ」

そう言っしてしゃがんで、コンタの前に手のひらを差し出した。クンクンとにおいを嗅いでいたが、やがてペロペロと舐め始めた。ウンボクが驚いた顔をしている。コンタは警戒心の強い気難しい犬なのだ。喉元をやさしく撫でてやると、ブンブんと勢いよく尻尾を振った。

ウンボクが子犬を連れて相談に来た。飼い主を探しているという。母親に頼んでみたが駄目だった。戦時下では、人間が食べるものさえ困窮しているのだ。二人でこっそり飼うことにした。

わたしが家からくすねた食べ物運んだが、それだけではとても足りないないので、カエルやトカゲ、ザリガ



二なんかを捕ってきては焼いて食べさせた。おたまじゃくしはそのままガツガツ食べた。野犬の子なのだろう。

「ウンボク……」

振り返ると、モンペ姿の少女が立っていた。なかなかの美少女だ。

「ジアンヌナ！」

ウンボクが駆け寄った。少女の方がいくらか背が高い。年齢もいくつかなのだらう。それからやりとりはハングルなので、意味はわからない。少女がコンタの喉元を撫でた。

手慣れた動作だった。コンタがゴロンと転がって白い腹を見せる。  
(デレデレしやがって)

ウンボクがコンタの手綱を少女に手渡した。少女がかぶりを振って、手綱を返そうとする。ウンボクがコンタを抱きかかえた。そして、強引に彼女の腕の中にコンタを押し込んだ。

彼女はしばらく迷っていたが、わたしの顔を見て一礼した。ウンボクに一声かけて、コンタを抱いたまま帰って行った。

「ジアン姉さん、神戸の親戚にもらわれて行くんです……」

「立派な大きな家で、犬を飼う庭もあるんです……」

涙を流しながら、ウンボクが言った。自分に言い聞かせているようだった。

正面に「李伊穆之墓」とだけ彫られている。

(嘘をつきやがって……)

コンタがいなくなつて、ウンボクを詰問した。ウンボクは謝るだけで、何も説明しようとはしない。

「食ったんじゃないだろうな」

言っではいけない言葉だった。ウンボクの顔が強張った。

「食った！」

押し倒して拳を振り上げていた。ウンボクは殴られるままだった。号泣したのはわたしの方だ。

半年後に戦争が終わった。それからしばらくして、ウンボク一家の姿が消えた。その後の風聞で、三十年代になったウンボクが大阪で焼き肉のチェーン店を起して成功していることを知った。大阪に逢いに行つて、あのときのことを謝りたいと思つたが、決心できなかった。

ウンボクが亡くなったのは三年ほど前だ。遺言で、この墓地に埋葬された。ウンボクのことを知っている人間は、ここにはもうほとんど残っていない。

(家族のいる大阪ではなく、どうしてこの土地に?)

わたしの疑問でもあった。

バッグから柿を一つ取り出して、墓前に供えた。焼酎に漬けた渋柿をビニール袋に密閉しておく、二週間もすれば渋が取れて甘くなる。しわしわのウンボクの顔を思い出して顔が緩んだ。

(今年の吊るし柿ができる頃には、おまえのところに行けそうだ。お土産に持って行くからな)

合掌して瞑目、頭を下げた。

## まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
  - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30 (19:00 から変更)

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「北の人」

金田一京助 著 角川文庫

日本のアイヌ語研究の創始者であり、泰斗である作者の、アイヌの人たちとの熱い交流が描かれている。言葉を持たないアイヌは、ユーカラ(叙事詩)という独特の語りで記憶する。「口々相傳えて諷誦し、傳承し、(中略)知らず識らずに習得して、一人々々部落の生活に必要な教養を、此の間に施されて、育つのであった。」

野蠻だとされていたアイヌの風習の奥深い意義を明らかにすることで、現在人の軽薄なマナーを断罪、文字など「手段のまた手段、云わば、どうしても好い約束」。和人による差別の歴史にも言及、学者らしくない感情の昂った文章に感激。何度でも読み返したい本である。



## 「たけき流れに」

藤原てい 著 家の光協会

軽妙洒脱がもてはやされる世の中で、「猛き」心を綴ったゴツゴツと武骨なエッセイ集。教師になる夢を持っていた作者は、家庭の事情で学費を払うことができずに断念。しかし、「いい子供を沢山育て上げよう」との熱意は燦り、後年、地域の教育委員を長らく務めることになる。

長靴をはいた足を座席に投げ出している若者をたしなめたり、騒いでいる茶髪の高校生の集団を一喝したりと、読んでいる方がハラハラしてしまう。老いてなお「世のために」全力で生きている。雷おやじだったという新田次郎氏夫人で、「国家の品格」の藤原正彦の母である。



## 「誘拐の免罪符」

小島正樹 著 南雲堂

子供の頃から本格ミステリを読んできたが、最近はその手の本を手取る事も少なくなった。推理重視の「絵空事」に途中で白けてしまう。さて今回は……、最後まで読むことができました(笑)

5歳の女の子が自宅から誘拐された。犯人の要求は、警察に連絡して家に呼べというもの。そして、待機する捜査員に「公園の駐車場の桜の木の近くを掘れ」という奇妙な指示。ことごとく従来のセオリーを外しにかかっている。容疑者は誘拐された少女の親族5人だけ。それでも犯人の特定ができないように迷彩が施されている。動機に少し難ありで、着地が乱れたのが残念。



## どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

## どらくる俳壇&歌壇

天高し何処にも雲の峰見えず

近藤 昌平

虫の音に喜怒哀楽を思ふとき

冨久光

秋彼岸近づくころの海の風

片岡 正人

垣根越す萩の乱れる時となり

隆愚

凌霄花<sup>ノウゼンカズラ</sup>つひに井戸水涸れにけり

大槇 三代子

納骨を終えて新米いただきます

赤川 冬人

腹見せて屍<sup>かばね</sup>となりし蟬の身も

松岡 初枝

引きゆく蟻も一期のすがた

## 投稿&寄稿

### 「ネット販売のこと」

赤川 仁洋

古本屋を開業して、売上は予想以上に低空飛行が続いた。道楽でやるから「どら書房」だと強がったものの、売上がゼロの日があったりするとさすがに凹んだ。

困るのは本の買い取りで、専門書

を持ち込まれても過疎の田舎町ではまず売れる見込みはないので、「高かったんですよ」と言われても、まともな金額を提示することはできなかった。

好転したのはネット販売をするよ

※参加を歓迎します。

うになってから。最初は購入する側だった。「この作者のこういう本はありませんか？」と来店されても、持ち込みの本が頼りの小さな古本屋では、ほとんど要望に応えることができない。

インターネットで検索すると、絶版になった古本が比較的安価で手に入る。断つてばかりいるのも申し訳ないので、希望する本をほぼ原価で取り寄せるサービスを始めたなら、「ああ、この本をずっと探していたんですよ」と喜んでもらえた。

じゃあ、売る側になれないかと調べたら、意外と簡単に参入することができたのだ。最初はアマゾン、今はメルカリでも販売している。こんな本、誰が興味を持つんだ？というようなマニアックな専門書の方が出品数が少なく、プレミアム価格がつく。そして、それが売れるのだ。

ネット販売は世界中の人が顧客である。うちが出品するのはほとんど日本語の本なので、購入者は今のところ国内に限られているが、それでも日本国中がマーケットである。その中の一人でも購入したいと思う人がいたら、売買は成立する。

けっこう高い金額でも、その人にとっては貴重な本であり、探してい

た本である。買った人も嬉しいし、店頭では死蔵するしかないような本が新たな活躍の場を得たことになる。店としても利益が出るので、買取時に少しはまともな金額を提示することができる。ありがたいことである。

今では売上の約半分が、ネット販売によるものだ。道楽ではなく、少しはビジネスらしくなってきたのだが、ネット販売の問題点も実感するようになった。それはまた次の機会に。



短期連載寄稿 林原正好（鳥取県倉吉市）

「毛利家臣の赤川氏について」（その4）

2系譜上の重要な人物と出来事

(1) 赤川氏の遠祖とされる土肥実平

土肥実平は、遠く桓武天皇に始まる平氏の流れで鎌倉武士の名門有力御家人であり、土肥郷（現在の神奈川県湯河原町・真鶴町）を本拠とした武将である。

実平は、1180年の源頼朝挙兵に一族を率いて参陣し、石橋山の戦いで大敗した頼朝を真鶴岬から安房へ渡らせる手引きをし、その後も平家討伐や奥州征伐に参陣するなど鎌倉幕府創立に大きな功績を残した武

〔土肥実平公並夫人像〕

（JR湯河原駅前）



将である。石橋山で敗れた頼朝が今はこれまでと自害を決意したその時に、実平は「大將軍が鎧をぬいで自害するときには、それなりのやりかたがあるものです。」と行って、松葉を切っては鎧の下に敷かせ、かぶとをとってはその上におき、たいへん落ち着いてまことに立派なふるまいを見せた、ということである。

実平と西国の関係は、源氏が大勝した一ノ谷の合戦（1184年）の後、実平は、備前・備中・備後三カ国の軍事指揮官兼地方行政官である惣追捕使（のちの守護）の重職についており、また、安芸国沼田庄の地頭職を獲得している。

(2) 安芸国沼田庄の開発・発展に尽くした小早川茂平

土肥実平の曾孫の小早川茂平は、建永元年（1206年）に父景平から安芸国沼田庄を譲られ、沼田小早川氏の本拠となる高山城を築城しこの地の開発を積極的に推進すると

もに、芸備南部や瀬戸内海に勢力を拡張し、小早川氏発展の基礎を作っている。茂平は、承久の乱（1221年）に幕府方として戦い、その功賞として都宇竹原荘の地頭職を得ている。

また、茂平は、幕府の命により京都に常駐し、市内の警戒や六波羅探題の警備などを任務とする「在京奉公人」であり、一族の武士を率いてこの任にあたっている。

(3) 赤川氏の祖とされる小早川忠茂

『大日本古文書家わけ11小早川家文書』の「沼田小早川家系図」によると、小早川茂平の五男忠茂が赤川氏の祖とされている。

また、閩閩録赤川系譜によると、忠茂、清茂、茂遠、貞茂、政忠の流れが赤川氏の流れとされ、政忠から赤川氏を名乗っている。

また、忠茂が茂平から譲与された地について、忠茂の曾孫である頼平に沼田庄小坂郷、安芸国野義郷、伊予国高市郷が知行地として認められていることから、忠茂系に譲与されたものと思われる。

(4) 赤川氏の信濃国赤川領有の時期

閩閩録赤川系譜によると、忠茂の

4代後の政忠の時に「数度合戦盡粉骨、賜源氏、其上被下置給地之御教書、住信濃国赤川」とあり、給地の御教書を与えられ信濃国赤川を知行したとされている。

しかし、『萩藩諸家系譜』（岡部忠夫著）によると「忠茂は父茂平から所領の一部信濃国赤川邑を譲り受けた。」とあり、茂平の時にはすでに信濃国赤川は所領であったとしており、資料により赤川領有の時期に相違がみられる。

【赤川氏系譜】（『萩藩閩閩録から抜粋』）

桓武天皇十一代

実平 — 遠平  
土肥次郎

景平 — 茂平  
小早川次郎 本庄左衛門大夫

忠茂 — 清茂  
茂平五男

茂教 — 貞茂

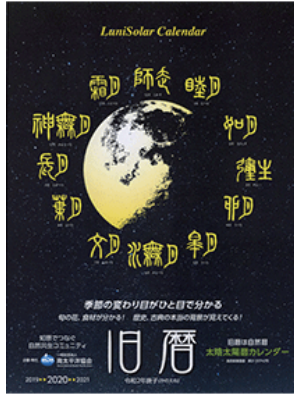
政忠

数度合戦盡粉骨、賜源氏、其上被下置給地之御教書、住信濃国赤川

# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

● **一 硬式テニス参加者募集 一**  
 MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)  
 場所：三次運動公園の屋内&屋外コート  
 ・火曜日 (9:30 ~ 12:00)  
 ・水曜日 (9:30 ~ 12:00)  
 ・土曜日 (10:00 ~ 12:00)  
 連絡先：中川 (☎080-5610-2376)

## 「旧暦カレンダー」 (販売価格：1,650円)

- ・日本の自然に根差した暦 (こよみ) です。
- ・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・新暦 (太陽暦) も併記しているので便利です。
- ・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和3年度版 予約受付中！

## 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
  - 教室&講座案内
  - イベント情報
  - あなたの大切な本の紹介
  - ボランティア・ライター (現地記者) 募集！
- ※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## ◇どら書房郷土資料本コーナー◇

郷土史関係の本や地元で出版された本、  
地元の方の作品集 (短歌俳句小説等)、地  
元に関係する本を揃えています。非売品  
で閲覧&貸出 (無料) しています。寄贈も  
歓迎します。

## どら書房無人野菜販売コーナー

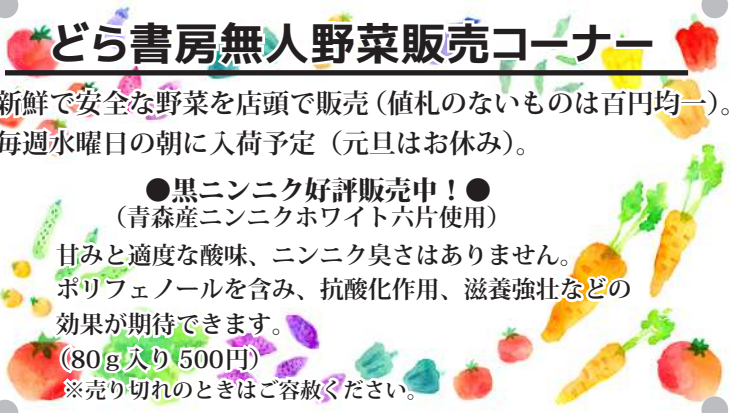
新鮮で安全な野菜を店頭で販売 (値札のないものは百円均一)。  
毎週水曜日の朝に入荷予定 (元旦はお休み)。

### ●黒ニンニク好評販売中! ● (青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。  
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの  
効果が期待できます。

(80g入り 500円)

※売り切れのときはご容赦ください。



## 編集後記

◇東豊子さんの「新しい村」、具体的な地名を出して紹介できて良かったです。わたしにとっては、新しい発見でした。郷土の大切な財産です。

◇今回の現代御伽草子は、去年亡くなった母親との会話がヒントになりました。介護生活の間に、たくさん話をすることができました。前号の「あうん」から読むことをお勧めします。

◇店舗の隣の空き地が、猛暑で草取りをさぼっていたらたちまち叢 (くさむら) に。その中で、大きな黄色い花が咲いていたのですが、カボチャだろうと思っていたら、今は大きな冬瓜が成っています。実りの秋なのだと実感。新米も楽しみです。

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052 (赤川)  
e-mail: touzin@nifty.com  
年間購読料：2,000円 (郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183  
協賛：九日市愛好会

